

ルヴァロワ技法の再考察

“古典的”ルヴァロワ剥離と円盤形石核剥離

大沼 克彦*

はじめに

今世紀の初頭に V. Commont がルヴァロワ技法を記述してからすでに八十余年が経過した [Commont 1909]。

Commont によれば、まず原石がその凹凸部分を除去されながら円盤形の石核へと準備される。次に石核の表面が修正され、稜線が求心方向に配列される。そして最後に、石核はその表面が少しばかり下方に傾斜するように（左手あるいは右手で）持たれ、細かく面取り調整されている打面の特に選ばれた部分が（石のハンマーで）好角度で一撃される。そして、石核表面の大部分が求心方向剥離痕を持つ大形剥片として剥離される [1909 : p. 122]。

1961年出版の F. Bordes の *Typologie du Paléolithique ancien et moyen* は、彼のルヴァロワ研究集大成とも言えるものである。この中で、ルヴァロワ剥片は“それが石核から剥離される前に石核上の特殊な調整でその形を予め定められるもの”と定義づけられている [p. 14]。

同書に於いてルヴァロワ剥片は三分類されている。背面に平行或いは求心的石核調整痕を残すルヴァロワ剥片、最大長が最大幅の2倍以上の（縦長ルヴァロワ剥片としての）ルヴァロワ石刃、そして、ルヴァロワ剥片（石刃）石核とは異なる特殊な石核から剥離され、剥片自体の剥離軸と剥片先端部の二分割線とが一致するルヴァロワ・ポイントである [pp. 17-18]。

のちに Bordes は、求心方向石核調整痕を持つルヴァロワ剥片（石刃）を“古典的”ルヴァロワ (type classique) として分類している [1980 : p. 45]。

1961年時点の Bordes のルヴァロワ概念は極めて広義なものである。そして、それが、同様に剥片や石刃の形をその上で準備する円盤形石核や角柱形石核などにもあてはまるため、この概念の曖昧性に対する C. B. M. McBurney 等の批判を浴びることとなる [West and McBurney 1954 : p. 147 ; McBurney 1967 : p. 77]。

McBurney 等の批判は、即ち、Bordes 自身も述べているルヴァロワ同定の困難性、そして、研究者各人の考古資料観察や復元製作の経験差から来る同定の多様性 [1961 : p. 17] にかかわる問題提起であったとすることが出来る。

そこで、Bordes は、*Le débitage Levallois et ses variantes* [1980] に於いて McBurney 等の批判に応えようとする。しかし、ルヴァロワと非ルヴァロワを識別するための説得力ある基準を提示することは出来なかったようである。

J. Tixier は1967年以来“Levallois technique”に対して“Levallois method”という用語を提唱してきた [Tixier 1967 : p. 813 ; Tixier et al. 1980]。

* 国士舘大学イラク古代文化研究所

この二つの用語を比較するとき、後者は前者以上に、原石の荒削に始まり石核調整を経て最終的にルヴァロワ剥片が剥離される全工程を意味する。

それ故、この新用語の提起は、ルヴァロワ石核やルヴァロワ剥片を特定石器インダストリーの標準化石にみたてさせた〔Breuil 1932 : pp. 571-572〕それまでの型式中心的な研究傾向に対する疑問の表現であったと思われる。

1980年出版の *Préhistoire de la Pierre taillée : 1: terminologie et technologie* に於いて、Tixier 等はルヴァロワ石刃と後期旧石器的“真正”石刃の違いの説明を試み、前者を、非平行的な稜線を持ち、2つの相対する打面を持つ長方形の石核から連続剥離された石刃と定義した〔p. 46, p. 50〕。

この定義は、Bordes によるそれまでの規定、即ち、最大幅の2倍以上の最大長を持つルヴァロワ剥片としてのルヴァロワ石刃〔1961 : p. 18〕、よりも厳密なものである。

Tixier 等は更に“真正”石刃に伴う重要な特徴として、石刃連続剥離を容易にするために石核剥離開始段階で準備・剥離されるトサカ状稜線を持つ石刃 (crested blade) の存在を挙げている〔1980 : p. 50〕。

以上の Bordes と Tixier によるルヴァロワ研究は、それぞれ考古資料の観察と復元製作に基づき、机上の空論には無い説得力を持っている。それ故、今日まで、ルヴァロワ研究の指標的方法論となってきた。

にもかかわらず、ルヴァロワ剥離にかかわる論議は今尚尽きず、研究者各人が独自の解釈でルヴァロワ資料を分析している現状を見る。

このことはとりもなおさず、Bordes 等のルヴァロワ規定がもともとヨーロッパ資料に関するものであり、中近東など世界各地で様々な時代に異なる契機で出現したと思われる〔Bordes 1968 : p. 137〕ルヴァロワ剥離の変異例にはそのままあてはまらなかったことを示している。

1970年代も半ばになると、F. C. Munday が異なる剥離工程に対応する石核の形態差に着眼する〔1976〕。

Munday は、イスラエル・ネゲヴ砂漠のムステリアン石器群の多様性を見る中で、遺跡と石器素材原産地との距離を考慮しながら〔1976 : p. 119〕、一見異なる型式に属するかに見える石核のいくつかを、ルヴァロワ剥離初期段階石核、典型的ルヴァロワ石核、そして、最終放棄段階としての不規則 (irregular) 石核など、異なる剥離工程に対応するものとして記述した〔1976 : p. 129, p. 131, p. 133〕。

1983年には、イスラエル・Boker Tachtit 遺跡出土の中期旧石器／後期旧石器移行石器群にかかわる A. E. Marks 等のルヴァロワ研究が現われる〔Marks and Kaufman 1983 : pp. 69-125 ; Volkman 1983 : pp. 127-190〕。

この研究は、出土石核と剥片の接合例に基づき、Boker Tachtit 遺跡第Ⅰ層のルヴァロワ・ポイントが、トサカ状稜線を持つ石刃に後続して剥離され、通常のルヴァロワ・ポイント剥離工程にはよらないこと、そして、第Ⅳ層のルヴァロワ・ポイントが単一打面石刃石核上の石刃連続剥離過程で剥離されていることを述べ、ルヴァロワ研究における接合作業の重要性を示している。

ところで、今日の主導的ルヴァロワ研究者として E. Boëda の名を挙げることに異論はないだろう。

Boëda は先ず（剥片剥離は表面に限られ、裏面には打面作成用の剥離だけが認められる）片面剥離性をルヴァロワの大前提とし、次いで、それを、彼自身が復元製作で具体的に示す異なる二つの剥離概念に大別する。即ち、*méthode linéale* と記述され、単一の四角形剥片、三角形剥片、ポイント、或いは、尖頭縦長剥片が剥離される単一剥離ルヴァロワ、そして、*méthode récurrente* と呼ばれ、剥片、石刃、或いは、ポイントが連続剥離される複数剥離ルヴァロワの二つである。複数剥離ルヴァロワは、更に、一方向剥離 (*méthode récurrente unipolaire*)、

相対する二方向剥離 (*méthode récurrente bipolaire*)、そして、求心方向剥離 (*méthode récurrente centripète*) の三者に細分されている [1988a; 1988b]。

以上、欧米におけるルヴァロワ研究の歴史とその現状を概観した。

ルヴァロワをめぐっては、石核調整剥片と目的ルヴァロワ剥片の相違、“古典的”ルヴァロワ剥離と円盤形石核剥離の関係、更には、ルヴァロワ石刃と後期旧石器的“真正”石刃の識別など未解明の問題が少なくない。

筆者は本誌前号で、自身が製作した“古典的”ルヴァロワ剥片とその石核調整剥片にかかわる形態・形式的及び測定値的な特徴を報告し、また、ルヴァロワ剥片石核と円盤形石核を識別することの困難さを指摘した [Ohnuma 1990: p. 126]。

本稿は、ルヴァロワ剥離と円盤形石核剥離にかかわる問題点、とりわけ、“古典的”ルヴァロワ剥離と円盤形石核剥離の関係についての試験的な考察である。

円盤形石核について

円盤形石核については、Bordes の *Typologie du Paléolithique ancien et moyen* [1961] 以外に見るべき記述はないようである。

この中で Bordes は、円盤形石核 (*nucléus discoïde*) を剥離工程の違いから二分した。

その一は、表面をルヴァロワ状に求心調整された石核から、大形の前定剥片 (ルヴァロワ剥片) が剥離される代りに、スード・ルヴァロワ・ポイントを含む剥片が (石核表面中央部に極度の高まりを残さないように) 求心方向に連続剥離されて石核が放棄される工程である。この場合、剥離が石核の表裏両面に及ぶこともある。その二は、ルヴァロワ剥片を剥離されたルヴァロワ石核が放棄されず、そのまま続けて、工程その一と同様に連続剥離されるものである [1961: p. 16, pp. 72-73]。

Bordes は、既に1953年時点で、円盤形石核とルヴァロワ石核が同一技術によるものであり、それぞれ、遺跡の立地差に由来する石材獲得の容易性あるいは困難性を表わしたものに他ならないことを述べている。即ち、石材豊富なオープン・サイトのムステリアンは贅沢なルヴァロワ石核を残し、一方、石材の少ない洞穴や岩陰遺跡のムステリアンに於いては、搬入石核は可能な限り剥離され、その結果、最終的に円盤状の形で放棄されたとするのである [pp. 232-233]。

前述したように、Boëda はルヴァロワを単一剥離ルヴァロワと複数剥離ルヴァロワに二分する [1988a; 1988b] が、複数剥離ルヴァロワのうちの求心方向複数剥離 (*méthode récurrente centripète*) と円盤形石核剥離との関係は、上記 Bordes の1953年論文が提起した“異環境下での同一技術の異表現”という問題にかかわる重要な研究課題である。

我国に於いては、安斎正人がこのルヴァロワ石核と円盤形石核の問題に取り組んでいる。

安斎は、レバノン国・ケウエ洞穴遺跡出土の中期旧石器の石核の分析に際して、そこに“ボルドのわずかな包括的用語だけでは表現しきれない、重要な歴史的・地理的現象 [1977: p. 61]”のあることを見出し、下に引用するケウエ独自のルヴァロワ及び円盤形両石核の定義を作製し、その内容を反映させるための、技術的基準 (背面と打撃面の調整と腹面の形状) に形態的基準 (外形と断面形) と機能的基準 (剥片の種類と数) を加味して創作した、分類体系を具体的に提示した [1977; 1982; 1983]。

“亀甲形石核：典型的標本の背面をみると、周縁部全体に亘って連続した剥離痕があり、その一端にこれとは

違質の、その後につけられた複数の小剥離痕 (facets) が並ぶ。この小剥離痕が形成する打撃面は、石核の腹面とはほぼ直角に近い角度をなしている。背面は凸形で中央に原礫面 (cortex) を残している。次に裏返して腹面をみると、その周縁に7~10個、時には15以上もの小剥離痕が求心状に並ぶ。これらの剥離痕は、背面の一端につけられた上記の特別な打撃面をたたいて剥離した、1個の大型の楕円形剥片の剥離痕によって切截されている。石核全体の外形は亀(甲)に類似する。円盤形石核：背面は亀甲形石核と大差ない。ただし、周縁のどこにも打撃面用の特別な小剥離痕はみられない。腹面には単一の大型剥離痕の代りに、2~3から5~6個の求心状の剥離痕がみられる。円形に近い外形で、横断面は凸レンズ形を呈する。”[1977：p. 66]。

安斎の分類の詳細は割愛するが、ルヴァロワ石核と円盤形石核それぞれの明瞭な定義づけが今尚なされていない状況を見ると、すでに十年前に安斎がその必要性を指摘していることは評価すべきである。

ところで、円盤形石核なる呼称は、その言葉が自ずから示すように、もともとは形に由来している。一方、剥離工程を示すルヴァロワは、亀甲形、円盤形、或いは、角柱形であれ、種々の形の石核上に表現され得るのであり、イコール特定の形態ではない。

これら二種の石核は全く異なる基準による分類範疇である。このことは留意すべき事柄である〔大沼 1986：70頁〕。

ルヴァロワ剥離と円盤形石核剥離にまたがる問題点

既に述べたが、筆者は“古典的”ルヴァロワ剥片を製作し、その石核調整剥片にかかわる形態・型式的及び測定値的な特徴を本誌前号で報告した〔Ohnuma 1990〕。

この復元製作は5例を数え、山形県寒河江市月布町の月布川河岸で採集した珪質頁岩塊を素材とした。

月布町の東方約14 km には高瀬山遺跡がある。同遺跡からは、阿部祥人〔Abe 1976〕がその剥離工程を記述した流紋岩製の両面剥離ルヴァロワ様石核が発見されている。

復元製作工程の途中で生じた石核調整剥片と最終剥離された目的ルヴァロワ剥片はそれぞれ種々の属性について分析された。

属性のうち、形態的或いは型式的なものは、打面特徴〔Bordes 1947：pp. 7-8；1961：p. 5〕、背面上剥離痕型式〔Tixier 1963：p. 43；Bordes and Crabtree 1969：pp. 2-3；Crew 1975：p. 429〕、背面輪郭形態〔Marks 1976：p. 372〕、先端部形態〔Marks 1976：p. 372〕、タテ断面形態〔Marks 1976：pp. 372-373〕から成り、また、測定値的なものは、打面最大幅、打点直上の打面厚〔Wilmsen 1968：p. 984〕、最大長〔Jelinek 1975：p. 304〕、最大長と直交する最大幅〔Bordes 1961：p. 6〕、最大厚〔Munday 1976：p. 121〕、背面と打面で形成される剥離角〔Barnes and Cheynier 1935：p. 289〕、そして、背面上の剥離痕数から成る。

以下に列举するものは主要な分析結果である。

1. 石核側面調整剥片は背面の全て或いは部分的に自然面 (cortex) である。
2. 石核表面調整剥片の背面は概して剥離痕である。
3. 石核側面調整剥片の打面は一枚の剥離面 (plain) であることが多い。
4. 石核表面調整剥片の打面は自然面、一枚の剥離面、或いは、山形をなす二枚の剥離面 (convex dihedral faceted) であることが多い。
5. 石核側面調整剥片はその背面上に単一 (single) か一方向 (unidirectional) の剥離痕を持つことが多い。

6. 石核表面調整剥片の背面は斜交する (crossed) 剥離痕であることが多い。
7. 石核側面調整剥片のタテ断面 (lateral profile) は腹面へ向けて湾曲する (incurvate) ことが多い。
8. 石核表面調整剥片のタテ断面は概して平坦 (flat) である。
9. 5例の製作で生じた石核調整剥片と再調整剥片の都合229点の約8%にあたる18点は、背面に斜交剥離痕 (14点) や求心 (centripetal) 剥離痕 (4点) を持ち、目的ルヴァロワ剥片と類似する。しかしながら、これら“擬似”ルヴァロワ剥片は、各製作例に於いて概ね目的ルヴァロワ剥片よりも小形であること、背面上剥離痕数がより少ないこと、そして、目的ルヴァロワ剥片の打面が微細な複数リタッチで入念に調整されている (multiple faceted) のに対し、18点中の8点だけが同様の打面を有していること、などで目的ルヴァロワ剥片とは異なっている (表1) (図1)。

表1 復元製作による最終目的ルヴァロワ剥片とその石核調整過程で剥離された“擬似”ルヴァロワ剥片の主要特徴

		最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	打面特徴	背面剥離痕型式	背面剥離痕数	剥離角	備考
製作1	最終目的ルヴァロワ剥片	86	61	10	MF	求心剥離	14	80°	
製作2	最終目的ルヴァロワ剥片	67	52	11	破損	求心剥離	16		
製作3	石核表面調整剥片	72	22	11	MF	斜交剥離	4	55°	石刃
	石核表面調整剥片	68	44	11	CDF	斜交剥離	7	84°	
	最終目的ルヴァロワ剥片	60	62	10	MF	求心剥離	15	78°	
製作4	石核表面調整剥片	87	35	7	CDF	斜交剥離	5	68°	石刃
	石核表面調整剥片	66	41	9	破損	斜交剥離	5	79°	
	石核表面調整剥片	62	40	9	MF	斜交剥離	4	84°	
	石核表面調整剥片	62	33	4	PL	斜交剥離	9	68°	
	最終目的ルヴァロワ剥片 (失敗剥片)	80	74	9	破損	求心剥離	7		
	石核表面再調整剥片	51	38	4	MF	斜交剥離	6	78°	
	石核表面再調整剥片	37	52	8	MF	求心剥離	6	81°	
	石核表面再調整剥片	72	50	7	MF	斜交剥離	9	79°	
	石核表面再調整剥片	60	36	10	CDF	斜交剥離	6	71°	
	石核表面再調整剥片	60	38	7	MF	求心剥離	8	66°	
	石核表面再調整剥片	58	36	7	CDF	求心剥離	7	84°	
	石核表面再調整剥片	50	27	5	CDF	斜交剥離	4	79°	
	石核表面再調整剥片	49	28	5	MF	斜交剥離	5	80°	
	最終目的ルヴァロワ剥片	77	44	10	破損	求心剥離	13	87°	
製作5	石核表面調整剥片	70	57	10	PL	斜交剥離	4	62°	石刃
	石核表面調整剥片	72	36	6	破損	求心剥離	8		
	石核表面調整剥片	57	42	6	MF	斜交剥離	5	81°	
	石核表面調整剥片	60	47	9	PL	斜交剥離	6	67°	
	最終目的ルヴァロワ剥片	100	78	10	MF	求心剥離	14	77°	

PL: Plain (一枚の剥離面); CDF: Convex dihedral faceted (山形をなす二枚の剥離面); MF: Multiple faceted (微細な複数リタッチで入念に調整されている); 石刃: Bordes [1961: p. 18] の定義“最大長が最大幅の2倍以上あるルヴァロワ剥片”による。

上記項目9の“擬似”ルヴァロワ剥片は、単一剥離ルヴァロワの石核調整過程で偶然に剥離されることもあるが、より頻繁には、失敗剥離後の、或いは、複数剥離のための石核表面全体に亘る再調整過程で剥離されると思われる。というのも、石核再調整の時点に於いては、石核上の剥離面は殆ど自然面を残さず多少なりとも求心方向に配列された剥離痕で構成されているからである。

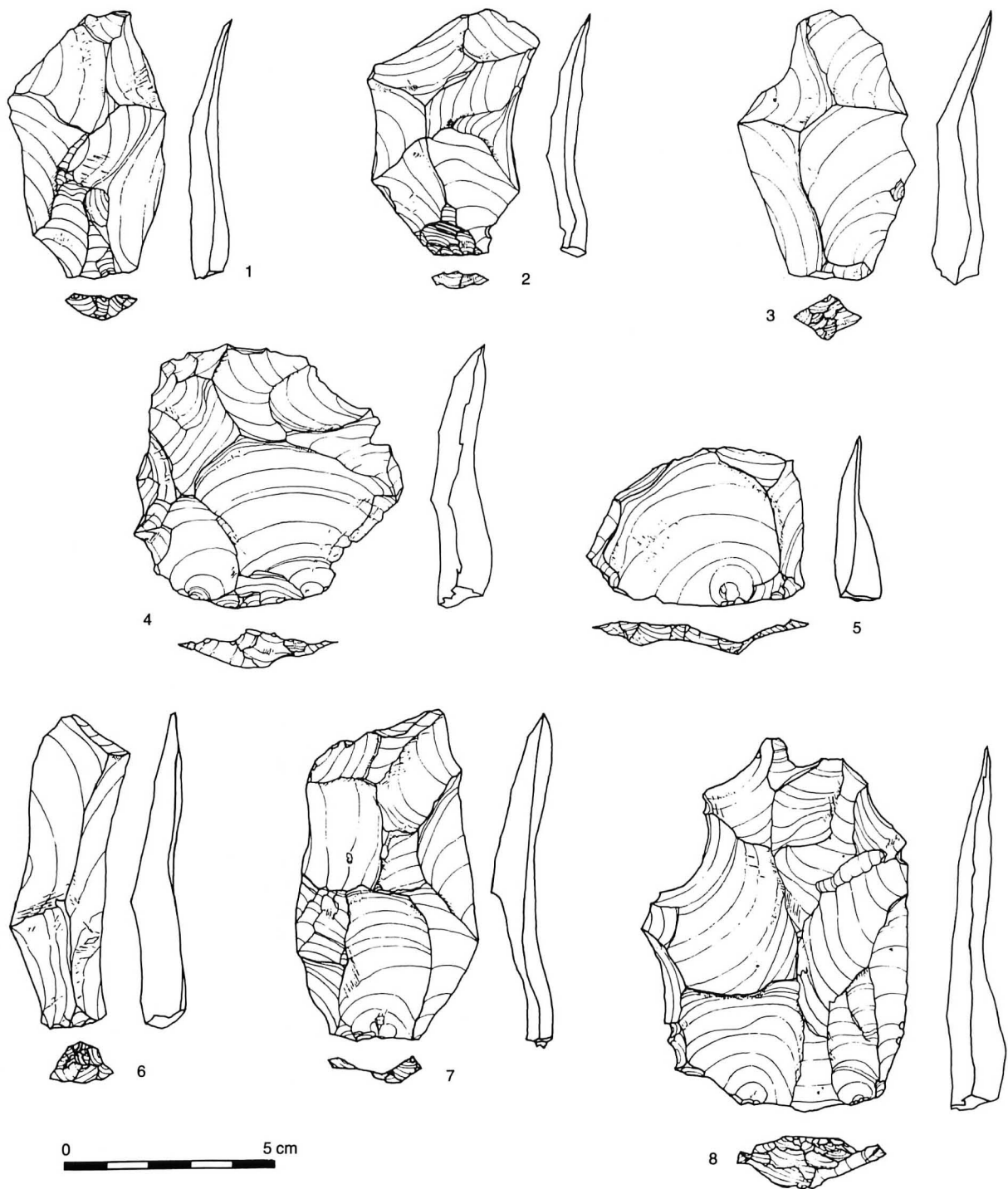


図1 復元製作による石核調整・再調整剥片と目的ルヴァロワ剥片

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1. 石核表面再調整に由来する“擬似”ルヴァロワ剥片 | 5. 石核表面再調整に由来する“擬似”ルヴァロワ剥片 |
| 2. 石核表面再調整に由来する“擬似”ルヴァロワ剥片 | 6. 石核表面調整に由来する“擬似”ルヴァロワ石刃 |
| 3. 石核表面調整に由来する“擬似”ルヴァロワ剥片 | 7. 目的ルヴァロワ剥片 |
| 4. 目的ルヴァロワ剥片 | 8. 目的ルヴァロワ剥片 |

ここで、石核調整或いは再調整過程で意図なく剥離される“擬似”ルヴァロワ剥片と目的ルヴァロワ剥片を如何に見分けるかという問題が生ずるが、特に、石核表面全体を除去しないルヴァロワ剥片が剥離される場合、これらを識別することは容易でない。そして、目的ルヴァロワ剥片の同定とその統計用数量化の中身は研究者各人によって異なるはずである。

それ故、特定石器資料におけるルヴァロワ剥片の重要性はその出現頻度ではなく、むしろ、それが共伴石核などとともに石器資料の製作技術を復元し得る点にあると言うべきである。

ここで本題にもどり、“古典的”ルヴァロワ剥離と円盤形石核剥離にかかわる問題を考えてみることにする。

Bordes の“古典的”ルヴァロワに関する記述は、彼のごく一部の記述 [1961 : p. 17, Plate 3-2] を例外とすれば、この種のルヴァロワが目的剥片の複数剥離ではなく、むしろ、単一剥離を意図したものであるとする。

しかしながら、石材豊富な場所に於いてすら、“古典的”ルヴァロワ複数剥離の可能性を否定することは出来ないだろう。

この複数剥離には、目的剥片剥離の失敗にもかかわらずルヴァロワ石核が放棄されず、或いは、当初の剥離計画が変更される [Bradley and Sampson 1986 : p. 30] ことなく、初めに計画された形や大きさを持つルヴァロワ剥片が石核再調整後に剥離された場合、更には、既に原石荒削り段階で複数剥離が意図されていた場合が想定される。

ところで、筆者の復元製作のルヴァロワ失敗剥離後に施された石核再調整は石核表面全体に亘り、2番目に剥離されたルヴァロワ剥片は、より大きく、背面上剥離痕数が多く、打面がより入念に調整されているなどの点で、石核再調整剥片とは異なっている。また、残核は1枚の主要剥離面を持つ亀甲形を呈している。

Boëda の求心方向複数剥離ルヴァロワ図式 (*méthode récurrente centripète*) に於いては、2番目以後のルヴァロワ剥離のために施される石核再調整は、最初のもののための石核調整のような石核表面全体に亘るものではなく、石核表面周縁部に施される部分的な修正である。また、再調整後に剥離されるルヴァロワ剥片は石核表面の大部分を除去するものではない [1988a : Fig. 7]。それ故、石核(再)調整剥片と2番目以後のルヴァロワ剥片との違いは小さく、ともに、円盤形石核に由来する剥片と酷似する。また、残核は円盤状の形を呈し、片面剥離の円盤形石核から区別しにくいものとなる。

さて、円盤形石核からすぐさま連想させられるものはスード・ルヴァロワ・ポイント [Bordes 1961 : pp. 22-23] である。

この剥片範疇と関連することだが、筆者の復元製作に於いては合計235点にのぼる剥片のうちの3.4%を占める8点が石核調整過程で典型的スード・ルヴァロワ・ポイント [Bordes 1961 : Fig. 3-7] として剥離された。しかし、この頻度は決して高いものとは言えない。

松沢亜生はフランス・le Tilet 遺跡出土の“古典的”ルヴァロワ剥片の背面上剥離痕の形とそれらの切り合い関係を観察したが、この剥片の母核であった“古典的”ルヴァロワ石核からその剥離工程途中でスード・ルヴァロワ・ポイントが剥離された可能性については懐疑的である [1987 : p. 19]。

これら2例の観察だけをもって“古典的”ルヴァロワ石核から偶然に典型的スード・ルヴァロワ・ポイントが剥離された可能性の高低を論ずることは勿論不可能である。

円盤形石核を典型的スード・ルヴァロワ・ポイントの意図的剥離用素材としてみる [Bordes 1961 : p. 16, pp. 72-73] ならば、たしかに、この石核と“古典的”ルヴァロワ石核の違いは大きくなるだろう。

とはいえ、筆者に関する限り、典型的スード・ルヴァロワ・ポイント剥離用素材としての円盤形石核の実物資料を未だ知らない。そこで、筆者は、典型的スード・ルヴァロワ・ポイントとの不可分離性に於いて円盤形石核を理解するのではなく、むしろ、この石核の持つ円盤状の形態及び複数剥片の求心方向連続剥離という点で理解しているのである。

ここで問題となるのは、筆者の理解する円盤形石核と Boëda [1988a] の謂う求心方向複数剥離ルヴァロワ石核との関係である。

筆者の復元製作で見られたように、求心方向複数剥離ルヴァロワは、目的ルヴァロワ剥片と石核再調整剥片の間に背面上の剥離痕数などなんらかの違いを示し、その意味では、相互に類似した目的剥片が連続剥離される円盤形石核剥離とは相違するかもしれない。

しかし、前述したように、この相違は、求心方向複数剥離ルヴァロワにおける再調整後のルヴァロワ剥片が、最初のもの同様に、石核表面の大部分を除去する場合に生じ得るのである。

Boëda の、大がかりな再調整を欠く、求心方向複数剥離ルヴァロワの図式では、最初の石核調整がその表面全体に亘るのに対し、再調整は石核表面の部分修正である。そして、2番目以後のルヴァロワ剥片は、部分修正を施された石核表面の周縁を廻りながら剥離される [1988a: Fig. 7] ので、最初のものに比べて小形で、その背面上の剥離痕は必ずしも典型的な求心型ではない。それ故、残核と2番目以後のルヴァロワ剥片は、石核表面の剥離痕型式、剥片背面の剥離痕型式、そして、剥片背面の剥離痕数などの点で、円盤形石核とそれに由来する剥片に酷似する。

Boëda の求心方向複数剥離ルヴァロワは、Bordes [1961: p. 73] が記述した、一旦ルヴァロワ剥片を剥離された石核が放棄されずそのまま求心方向に連続剥離される、円盤形石核の一工程に極めて類似すると言わざるをえない。

まとめ

“古典的”ルヴァロワ剥離と円盤形石核剥離に関する筆者の考えを整理してみよう。

先ず留意すべきことは、石核はさまざまな属性を持ち、その分類体系と範疇は基準となる属性の違いに応じて異なるということである。

石核の属性としては、形態、剥離回数、そして、剥離痕型式などがある。

このうち、形態に基づく石核範疇としては、Bordes [1961] と Leroi-Gourhan [1965] のものがある。球形、円盤形、亀甲形、円錐形、双円錐形、角錐形、双角錐形、円柱形、そして、角柱形の石核である。

剥離回数に基づく石核範疇は Boëda のルヴァロワ分類のものを代表とする。Boëda の剥離回数は目的剥片剥離だけに係し、目的剥片の形を準備する石核調整剥離を除外している。分類は、大きく、単一剥離ルヴァロワ、そして、一方向剥離、相対する二方向剥離、及び、求心方向剥離の三者からなる複数剥離ルヴァロワの二者で構成されている [1988a; 1988b]。

剥離痕型式による石核範疇としては、Leroi-Gourhan [1965] のものが良く知られている。その剥離痕型式は、一方向型、相対する二方向型、そして、三方向以上の求心型である。

さて、Bordes の1961年著書における前期と中期旧石器にかかわる石核分類は、ルヴァロワ（剥片、ポイント、石刃）石核、プロト・ルヴァロワ剥片石核、ムステリアン円盤形石核、角柱形石核、角錐形石核、そして、球形

石核、不定形石核、不可分類石核の三者からなるその他の石核で構成される [pp. 71-73]。

この分類では、工程に基づく石核範疇（ルヴァロワ石核とプロト・ルヴァロワ石核）と形態に基づく範疇（円盤形石核、角柱形石核、角錐形石核、球形石核、不定形石核）とが混在する。これら二群の石核範疇は本来異なる分類基準によるものであり、同一分類の中に共存すべきではない。即ち、これらの石核を形態的基準による呼称で統一するならば、ルヴァロワ剥片石核とプロト・ルヴァロワ剥片石核は、亀甲形石核、円盤形石核、或いは、角柱形石核などとされるべきであろうし、また、ルヴァロワ・ポイント石核とルヴァロワ石刃石核は、角柱形石核或いは角錐形石核などとされるべきである。

1960年前後の Bordes のルヴァロワ概念の曖昧性に対して McBurney が疑問を投じたことについては前述した。この問題提起の中で McBurney はルヴァロワ剥片を複数方向の調整剥離痕と真正打面調整の両者を兼ね備えたものと定義し、ルヴァロワ剥離と円盤形石核剥離を識別するための一手段を提示した [1967 : p. 77]。

しかしながら、McBurney の定義は、石核調整と目的剥片剥離に対する入念さの異なるかに見える“古典的”ルヴァロワ剥離にはあてはまるものの、短く剥離した失敗ルヴァロワ剥片、或いは、部分修正された石核表面から短めのルヴァロワ剥片が後続剥離される複数剥離ルヴァロワなどには必ずしもあてはまるわけではない。それ故、多様なルヴァロワ剥離に由来する多様なルヴァロワ剥片すべてに有効であるとは思われないのである。

以上述べたことを踏まえ、筆者はここに一つの石核分類を提起し、その中に多様なルヴァロワ石核と円盤形石核を位置づけてみる（表2）（図2）。

表2 剥離回数による石核分類

単一剥離石核：	
1.	石核調整を全く施されない単一剥片用石核
2.	剥離を導く稜線と打面とを準備する石核調整を経て単一の予定剥片が剥離される石核： ルヴァロワ剥片石核、ルヴァロワ石刃（縦長剥片）石核、ルヴァロワ・ポイント石核
複数剥離石核：	
1.	複数の剥片を剥離する際に剥離を導く稜線が準備されず既存の剥離面が打面として利用される石核
2.	剥離を導く稜線と打面とを準備する石核調整を経て複数の予定剥片が剥離される石核： ルヴァロワ剥片石核、ルヴァロワ石刃石核、ルヴァロワ・ポイント石核、 スード・ルヴァロワ・ポイント石核（片面剥離円盤形石核、両面剥離円盤形石核）、 後期旧石器的石刃石核
“古典的”ルヴァロワ石核の呈し得る形態：	
“古典的”ルヴァロワ石核	石核の形態
Boëda [1988a] の単一剥離（剥片）石核	亀甲形、片面剥離円盤形
Boëda [1988a] の求心方向複数剥離石核	亀甲形、片面剥離円盤形
目的剥片未剥離の“古典的”ルヴァロワ石核	片面剥離円盤形

この石核分類は、石核の形態や剥離方向によるものではなく、剥離回数に基づくものであり、その土台となるものは Boëda のルヴァロワ石核分類 [1988a ; 1988b] である。

石核は先ず単一剥離石核と複数剥離石核の二群に大別される。次に、二つの石核群はそれぞれ目的剥片の形状を予め準備するための石核調整を施されたもの、そして、そうではないものの二者に分類される。各石核は剥離回数で範疇化されており、様々な形態と剥離方向に関連する。

石核範疇各々は、本来意図された剥離計画に関しては、常に分離するものではなく、相互に連続もし得るものである。例えば、本分類で石核調整のない単一剥離石核としたものには、もともとそのように意図されたものば

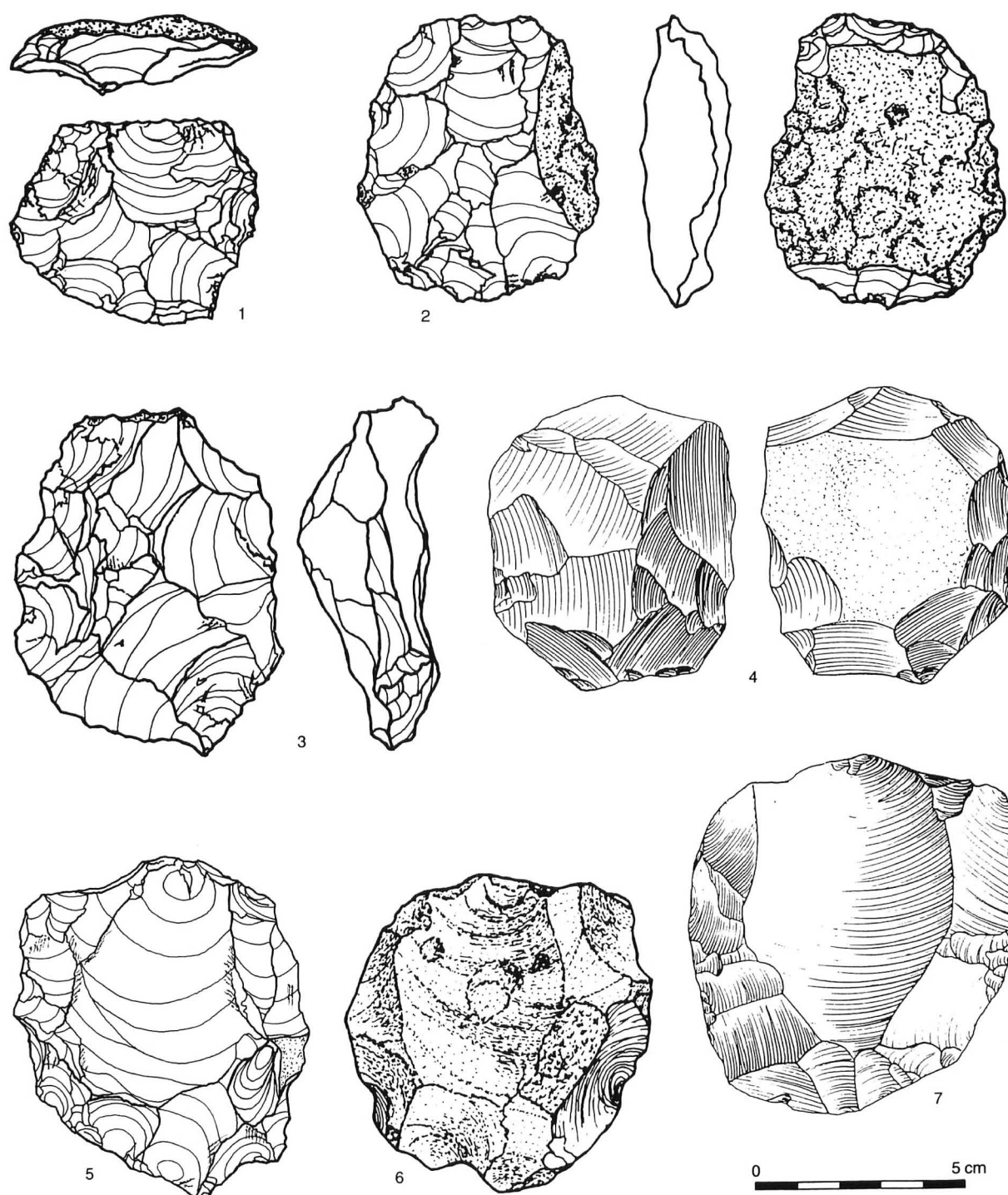


図2 “古典的”ルヴァロワ石核と円盤形石核

1. 円盤形石核或いは“古典的”ルヴァロワ石核（イラク・Tar Jamal 遺跡）
2. 円盤形石核或いは未剥離の“古典的”ルヴァロワ石核（イラク・Tar Jamal 遺跡）
3. 円盤形石核或いは未剥離の“古典的”ルヴァロワ石核（イラク・Tar Jamal 遺跡）
4. 円盤形石核（フランス・Combe-Grenal 遺跡）[Bordes 1961 : Pl. 106-5]
5. “古典的”ルヴァロワ石核（イラク・Tar Jamal 遺跡）
6. “古典的”ルヴァロワ石核（イラク・Tar Jamal 遺跡）
7. “古典的”ルヴァロワ石核（フランス・Montguillain 遺跡）[Bordes 1961 : Pl. 100-1]

かりではなく、その他の石核の、何らかの理由で終了された、剥離開始段階を示すものも含まれる。

円盤形石核は本来形態的基準による範疇であり、剥離回数に基づくものではない。しかし、本分類は円盤形石核を含んでいる。というのも、円盤形石核は多くの層でルヴァロワ石核と共伴し、それと緊密な技術的関連を持つと思われるからである。

亀甲形石核は、その典型例に於いては、(入念に調整された特定打面部分の分厚さ故に) 三角形のタテ断面を持ち、凸レンズ状の断面を持つ円盤形石核とは異なるだろう。とはいえ、これら二種の石核には中間形態もあり、明確に区別することは困難である。また、予定されたよりも小形のルヴァロワ剥片が剥離された場合、最終的に1枚の主要剥離面を持つはずであった残核表面は類似した複数剥離痕から成り、その逆もまたあり得るといように、これらの石核が、その放棄時点で、石核剥離開始段階で方向づけられた剥離面様態を示しているとは限らないのである。

円盤形石核は片面剥離と両面剥離のものに二分されるが、前者については、単一剥離“古典的”ルヴァロワ石核、複数剥離“古典的”ルヴァロワ石核、目的剥片未剥離の“古典的”ルヴァロワ石核、そして、スード・ルヴァロワ・ポイント剥離石核の四者とし、後者についてはスード・ルヴァロワ・ポイント用石核とした。但し、ここで言うスード・ルヴァロワ・ポイントは典型例だけではなく、台形などをした、外見上ルヴァロワ・ポイントには似ていない、斜軸剥片と呼ぶことも出来る非典型例〔Bordes 1961: Fig. 3-8〕をも含んでいる。

単一剥離と複数剥離、或いは、片面剥離と両面剥離という異なる剥離概念については、それらを異なる技術伝統の反映としてとらえるのではなく、むしろ、Bordes が述べた〔1953: pp. 232-233〕遺跡の立地差に由来する石材獲得の容易性や困難性というような外的要因とのかかわりの中でとらえることが出来るかもしれない。

これまで述べてきたことを整理し、円盤形石核を二分することが可能である。その一は単一或いは複数剥離の“古典的”ルヴァロワ石核であり、その二はスード・ルヴァロワ・ポイント石核である。

以上、筆者は一つの石核分類を提起し、その中にルヴァロワ石核と円盤形石核を位置づけた。

我国に於いても、特に宮城県内で、その最盛期の時代的背景は必ずしも解明されていないにせよ、円盤形の石核が疑いなく存在した〔鎌田 他 1989〕。その存在が大陸からの技術的伝播・人間渡来の証であるのか、或いは、日本列島における独自の技術的展開であったのかということは、重要、且つ、興味深い問題である。

この日本の状況、更には、ソヴィエトの学者が一種の円盤形石核をルヴァロワと記述しているシベリア〔梶原 1986: p. 24〕の状況については今後の研究課題としたい。

謝辞

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター松沢重生先生には本稿作成途中で有益な御教示を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

文献

Abe, Y.

1976 Levallois-like Core from Yamagata Prefecture, Japan, *The Journal of the Anthropological Society of Nippon*, 84 (3), pp. 246-251.

安斎正人

1977 ルヴァロワジアン技法とムステリアン技法—所謂《亀甲形石核》と《円盤形石核》に関する若干の考察, 『考古学

- 雑誌』63(2), 61-69頁。
- 1982 中期旧石器時代の剥片剥離技法—レバノン国ケウエ洞穴遺跡の石核群分析—〔上〕所謂「ムステイエ技法」に関連して、『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』1, 61-84頁。
- 1983 中期旧石器時代の剥片剥離技法—レバノン国ケウエ洞穴遺跡の石核群分析—〔下〕所謂「ルヴァロワ技法」に関連して、『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』2, 101-128頁。
- Barnes, A. S. and A. Cheynier
1935 Etude sur les techniques de débitage du silex et en particulier des nuclei prismatiques, *B.S.P.F.*, 32(5), pp. 288-299.
- Boëda, E.
1988a Le Concept Levallois et Evaluation de son Champ d'Application, *L'Homme de Néandertal, Vol. 4, La Technique*, Liège, pp. 13-26.
1988b Le Concept Laminaire: Rupture et Filiation avec le Concept Levallois, *L'Homme de Néandertal, Vol. 8, La Mutation*, Liège, pp. 41-59.
- Bordes, F.
1947 Étude comparative des différentes techniques de taille du silex et des roches dures, *L'Anthropologie*, 51, pp. 1-29.
1953 Levalloisien et Moustérien, *B.S.P.F.*, 50(4), pp. 226-235.
1961 *Typologie du Paléolithique ancien et moyen*, Publications de L'Institut de Préhistoire de L'Université de Bordeaux, Mémoire No. 1, Bordeaux.
1968 *The Old Stone Age*, World University Library, London.
1980 Le débitage Levallois et ses variantes, *B.S.P.F.*, 77(2), pp. 45-49.
- Bordes, F. and D. Crabtree
1969 The Corbiac Blade Technique and Other Experiments, *Tebiya*, 12(2), pp. 1-21.
- Bradley, B. and C. G. Sampson
1986 Analysis by Replication of Two Acheulian Artefact Assemblages, *Stone Age Prehistory*, edited by G. N. Bailey and P. Callow, Cambridge University Press, pp. 29-45.
- Breuil, H.
1932 Le Paléolithique ancien en Europe Occidentale et sa Chronologie, *B.S.P.F.*, 29(12), pp. 570-578.
- Brézillon, M. N.
1977 *La Dénomination des objets de pierre taillée: Seconde réimpression*, Éditions du C.N.R.S., Paris.
- Commont, V.
1909 L'industrie moustérienne dans le Nord de la France, Congrès Préhistorique de France, 5e Session, Beauvais, pp. 115-197, cited in M.N. Brézillon (1977): *La Dénomination des objets de pierre taillée: Seconde réimpression. Éditions du C.N.R.S., Paris, p. 79.*
- Crew, H. L.
1975 An Evaluation of the Relationship between the Mousterian Complexes of the Eastern Mediterranean: A Technological Perspective, *Problems in Prehistory: North Africa and the Levant*, edited by F. Wendorf and A. E. Marks, SMU Press, Dallas, pp. 427-437.
- Jelinek, A. J.
1975 A Preliminary Report on Some Lower and Middle Paleolithic Industries from the Tabun Cave, Mount Carmel (Israel), *Problems in Prehistory: North Africa and the Levant*, edited by F. Wendorf and A. E. Marks, SMU Press, Dallas, pp. 297-315.
- 梶原 洋
1986 シベリアの前期旧石器, 『考古学ジャーナル』270, 19-25頁。
- 鎌田俊昭・梶原 洋・山田晃弘
1989 宮城県の旧石器時代前・中期, 『第四紀研究』28(4), 283-292頁。

Leroi-Gourhan, A.

- 1965 Tableaux de Morphologie Descriptive. Chapitre Premier: Problèmes Methodologiques: Livre III. Problèmes et Directions de Recherche, *La Préhistoire*, edited by A. Leroi-Gourhan, G. Bailloud, J. Chavaillon and A. Laming-Emperaire, Presses Universitaires de France, pp. 245-271.

Marks, A. E.

- 1976 Glossary, *Prehistory and Paleoenvironments in the Central Negev, Israel, Vol. I: The Avdat/Aqev Area, Part 1*, edited by A. E. Marks, SMU Press, Dallas, pp. 371-383.

Marks, A. E. and D. Kaufman

- 1983 Boker Tachtit: The Artifacts, *Prehistory and Paleoenvironments in the Central Negev, Israel, Vol. III: The Avdat/Aqev Area, Part 3*, edited by A. E. Marks, SMU Press, Dallas, pp. 69-125.

松沢重生

- 1987 ルヴァロワ技法について (2), 『旧石器考古学』 34, 17-23頁。

McBurney, C. B. M.

- 1967 *The Haua Fteah (Cyrenaica)*, Cambridge University Press, London.

Munday, F. C.

- 1976 Intersite Variability in the Mousterian of the Central Negev, *Prehistory and Paleoenvironments in the Central Negev, Israel, Vol. I: The Avdat/Aqev Area, Part 1*, edited by A. E. Marks, SMU Press, Dallas, pp. 113-140.

大沼克彦

- 1986 ルヴァロワ技法研究小史, 『ラーフィダーン』 第VII巻, 国士舘大学イラク古代文化研究所, 55-76頁。

Ohnuma, K.

- 1990 An Analysis of the By-products of Experimental Manufacture of Classical Levallois Flakes, *al-Rāfidān*, XI, pp. 113-142.

Tixier, J.

- 1963 *Typologie de L'Épipaléolithique du Maghreb*, Arts et Métiers Graphiques, Paris.
1967 Procédés d'Analyse et Questions de Terminologie concernant l'Étude des Ensembles industriels du Paléolithique récent et de l'Épipaléolithique dans l'Afrique du Nord-Ouest, *Background to Evolution in Africa*, edited by W. W. Bishop and J. D. Clark, The University of Chicago Press, Chicago and London, pp. 771-820.

Tixier, J., Inizan, M.-L. and H. Roche

- 1980 *Préhistoire de la Pierre taillée. 1. terminologie et technologie*, Cercle de Recherches et d'Études Préhistoriques, Antibes.

Volkman, P.

- 1983 Boker Tachtit: Core Reconstructions, *Prehistory and Paleoenvironments in the Central Negev, Israel, Vol. III: The Avdat/Aqev Area, Part 3*, edited by A. E. Marks, SMU Press, Dallas, pp. 127-190.

West, R. G. and C. B. M. McBurney

- 1954 The Quaternary Deposits at Hoxne, Suffolk, and their Archaeology, *P.P.S.*, 20 (2), pp. 131-154.

Wilmsen, E. N.

- 1968 Lithic Analysis in Paleoanthropology, *Science*, 161, pp. 982-987.